

初期仏典にみる煩惱の消滅 ——煩惱の消滅の三つの形態——

並 川 孝 儀

〔1〕 はじめに

悟りや涅槃と煩惱の二つの問題は表裏一体であり、涅槃を論じることは同時に煩惱を論じることにもなる。そのことは、悟りや涅槃の境地に関する表現が悟りの妨げを取り除いたり、静めたりと、煩惱の消滅という否定的表現によって描かれていることが多いことから判る。このことは、例えば、四諦説で悟りという理想の境地が滅（nirodha）という否定的な語¹⁾でもって滅諦と表現され、またその他、無為、無漏、出離、遠離、離欲などを同類の用語として挙げる事ができるように、ほとんどが煩惱の滅する境地をもって表現されていることから知ることができよう。

本小論では、煩惱をどのように処すれば涅槃の境地が得られるのか、或いは悟りの妨げや苦などがどのようなのであれば涅槃の境地の状態であるのか、といった用例を眺め、そこから涅槃の関連用語の原義を探ろうとするものであるが、そのことは一方で煩惱の消滅の在り方を考察することでもある。ここでは、その中でも特に悟りの妨げがどのような方法によってなくなったり、制御や抑止がされたりするのか、といった消滅の形態や仕方に焦点を合わせ、その視点から原始仏教における煩惱論、延いては涅槃論の一端を明らかにしようとするものである。

この問題を論じるに当たっては、初期仏典の中でも古層に属する韻文文献を資料として考察することとする。

〔2〕 煩惱の消滅の三つの形態

どうすれば悟りや涅槃を体得できるのか、或いはどうであれば悟りや涅槃であるのかという文脈の中、その条件や状態を示す表現や用語を眺めると、それらの意味はおおよそ次の三種に類別できであろう。即ち、

(1) 悟りの妨げなどが「滅した、静まる、抑止している」との如き抑止、制御

や捨断の作用を意味する用語で表現されている用例

(2) 「取り除く、捨て去る、離れた」といった煩惱が離反、分離する作用を意味する用語で表現されている用例

(3) 「渡る、超えた」といった煩惱などから離れる作用、換言すれば超越とも言うべき作用を意味する用語で表記されている用例

である。このような分類は、或る意味では日本語訳の問題で処理できる例もあるかもしれないが、しかし基本的な動作を表現する作用は本質的な問題を孕んでおり、それに基づく分類には十分意義が認められる。このように、古層の韻文資料にはこの三種の形態によって悟りや涅槃の妨げとなるものの消滅方法が説かれている、と考えられるのである。このような論点は、煩惱などの消滅の仕方を解明するだけでなく、涅槃や悟りの在り方を知る手掛かりを与えてくれる問題でもある。

それでは、悟りの妨げなどがどのようにして消えると説かれているのかを、悟りや涅槃を体得する方法、悟りや涅槃の状態が説かれる文脈を有する多くの用例から眺めるが、以下においては紙面の都合でその条件や状態を示す表現や用語を最小限で示すことにする。

〔2-1〕 最古層の韻文文献での用例

先ず、最古層といわれる『スッタニパータ』第四章『アツカヴァアツガ』・第五章『パーラーヤナヴァアツガ』の用例を、上記のように三分類してまとめると、次のようである。

(1) 抑止の作用を意味する用例

「色・形、音声、味、香り、触れられるものに対する貪りを (rāgaṃ) 抑制しなさい (sahetha).」 (Sn.974d)

「老いと死が減している (jarāmaccuparikkhaya)」 (Sn.1094d)

「妄執が減している (taṇhakkhayaṃ)」 (Sn.1070d, 1137c, 1139c, 1141c)

「あらゆる存在が減することを (sabbadhammakkhayaṃ) 体得し、執著を完全に減して (upadhisamkhaye) 解脱している (vimutto)」 (Sn. 992ef)

これらの用例は、抑制や減ぼすという抑止することによって消滅することを示しているが、このことは動詞の語根が√sah (抑制する)、√kṣi (減ぼす) であることから知る事ができる。

(2) 離反の作用を意味する用例

「妄執を離れた人は (vītatāṇho)」 (Sn.1041b, 1060c)

「あらゆる欲望の対象に対して (kāmesu) 貪りを離れた人は (vītarāgo)」

(Sn.1071a, 1072a)

「名称と形態に対して (nāmarūpasmiṃ) 全く貪りを離れた人には (vītagedhassa)」

(Sn.1100ab)

「両極端に対する欲望を (chandam) 取り去るべきである (vineyya)」 (Sn. 778a)

「これらの存在に対する欲望を (chandam) 取り去るべきである (vineyya)」 (Sn. 975a)」

「執著しようとする妄執を (ādānatāṇham) すべて取り去りなさい (vinayetha)」

(Sn.1103a)

「さまざまな欲望の対象に対する貪りを (gedham) 取り去りなさい (vinaya)」 (Sn.1098a)

「貪り (lobham) と物惜しみと怒り (kodham) と中傷を追い払うべきである (panudeyya)」

(Sn.928cd)

「あらゆる暗黒を (tamaṃ) 取り除いて (vinodetvā)」 (Sn. 956c, cf. Sn.1136a)

「愛すべき事物に対する欲求 (chanda) や貪り (rāga) を取り除くこと (vinodanam) が、不減なる (accutaṃ) 涅槃の境地 (nibbānapadam) である」 (Sn.1086c)

「かの比丘は、心を一つにして、暗黒を打ち砕くべきである (vihane)」 (Sn.975d)

「矢を抜き去った (abbūlhasallo)」 (Sn.779c)

「無明を破ること (pabhedana)」 (Sn.1105d)

「垢と迷妄を捨て去り (pahinamalamohassa)、自惚れと自らの過ちを隠蔽することを捨てる者の (mānamakkhappahāyino)」 (Sn.1132b)

「欲望の対象を (kāme) 捨てて (pahāya)」 (Sn.1070c)

「妄執を (taṇhāya) 捨て去ることによって (vipphānena) 涅槃 (nibbānam) といわれる」

(Sn.1109c)

「この世における生まれ老いてゆく存在を (jātijarāya) 捨て去ること (vipphānam)」

(Sn.1097e, 1120e, 1122f)

「過去からの〔煩惱という〕水を干からびさせよ (visosehi)」 (Sn.949a, 1099a)

「様々な生存の在り方に対するこの執著を (bhavābhavē saṅgam imaṃ) 捨て去って (visajja)」 (Sn.1060b)

「彼はあらゆるものを捨て去って (paṭinissajja)」 (Sn.946c)

これらの用例は、いずれも離反・分離の作用をもって煩惱などの消滅を説き示したものであるが、そのことは動詞の語根によって知ることができる。それらの語根を示すと、vi√i (分離する)、vi√nī (取り去る)、pra√nud (追い払う)、vi√nud (追い払う)、vi√han (打ち砕く)、ā√barh (引き抜く)、pra√bhid (裂く)、pra√hā (捨

て去る）、vi-pra√hā（投げ捨てる）、vi√suṣ（干からびる）、vi√srj（発射する）、pratinis√srj（放棄する）である。このように、いずれも離反・分離を意味するが、特に注意しておく必要があるのは、離反の意味が主体から外に取り除く作用を有している点である。次の分類（3）も離反の作用を有するものの、この点が分類（3）と大きく異なる点である。

（3）超越の作用を意味する用例

「彼は執著を（visattikam）渡りおえた（atāri）」（Sn.857d）

「彼は生まれ老いてゆく存在を（jātijaran）渡りおえた（atāri）」（Sn.1048d, 1060d）

「そうすることによって、あなたはこの洪水を渡るであろう（taresi）」（Sn.1064d）

「あなたは世間にありながら執著を（visattikam）渡るであろう（tare）」

（Sn.1053d, 1054d, 1066d, 1067d, 1085d, 1087d）

「煩惱の洪水を（ogham）渡りなさい（tarassu）」（Sn.1070b）

「その人は、正しい思いをもち、世間にありながらこの執著を（visattikam）超えている（samativattati）」（Sn.768cd）

「シャカ族の人よ、私を疑い合う議論から（kathamkathāhi）解き放って下さい（pamuñca）」（Sn.1063d）

「煩惱の洪水をのり超えた（oghātigam）」（Sn.1096b）

これらの用例に共通している内容は、離れるという点であるが、それは分類（2）の取り除くといった主体から外に離れるという意味と正反対に、超えるといった主体が外へ離反する作用を有しているのである。この作用を示す動詞の語根を記すと、√tī（渡る）、sam-ati√vṛt（越える）、pra√muc（解放する）、ati√gam（通過する）である。

以上、最古層といわれる韻文資料から煩惱や悟りの妨げなどがどのような文脈で消滅するとされているのかを眺めた。それによると三つの分類の用法とも見られたが、中でも（2）離反・分離の作用を示す用例が最も多く、（1）の用例は比較的少ないことが判った。

〔2-2〕 その他の古層の韻文文献での用例

次に、その他の古層に属すといわれる『スッタニパータ』第一章～第三章、『テーラガーター』、『テーリーガーター』などの諸文献に見られる用例を概観し、その主要例を上と同様の方法でまとめると、以下の如くなる。

(1) 抑止の作用を意味する用例

- 「煩惱が滅した (āsavakhiṇo)」 (Sn.370a)
 「煩惱を滅した (khiṇāsavo)」 (Th.1022a, Thī. 66c)
 「あらゆる煩惱が滅した (sabbāsavaparikkhiṇā)」 (Th.928a)
 「苦しみは (dukkham) 抑止されている (nirujjhati)」 (Th.227d, 263d)
 「感受を減することによって (vedanānaṃ khayā)」 (Sn.739e)
 「識別作用を静めることによって (viññāṇūpasamā)」 (Sn.735c)
 「あなたの貪りは (rāgo) 寂靜である (upasanto)」 (Thī.16c)
 「感官を制御した (katindriyā)」 (Th.725c)

ここには、この作用を表す動詞の語根として、 $\sqrt{kṣi}$ の他に、 $ni\sqrt{rudh}$ (抑止する)、 $upa\sqrt{sam}$ (静まる) などが見られる。

(2) 離反の作用を意味する用例

- 「塵のない (virajam)」 (Th.227c, 263c, 1238c, Thī.97c)
 「貪りを離れ (vitarāgo), 怒りを離れ (vitadoso), 迷妄を離れ (vitamoho), 煩惱のない人は」 (Th.704ab)
 「束縛を離れた人々は (visamyuttā)」 (Thī.86c)
 「執著を離れた人は (visaññutto)」 (Th.1022a)
 「欲を離れた (virajja)」 (Thī.26b, 86b)
 「無明を (avijjaṇ) 離れて (virājjiya)」 (Thī.18cd)
 「欲望を取り去ることによって (vināyaya) 解き放たれる (muccati)」 (SN.I-7-9)
 「煩惱の網を (jāliniṃ) 引き裂いて (abbahitvāna)」 (Th.162b)
 「妄執を根こそぎ引き抜いて (samūlaṃ taṇham abbuha)」 (Th. 298c, Thī.15c, 18e)
 「矢を抜き去った (abbūlhasallā)」 (Sn.593a, Thī. 53a, 132a)
 「生存の根本を (bhavamūlaṃ) 吐き出して (vamitvāna)」 (Th.576c)
 「虚妄に区別立てして対象を捉えることを (papañcam) 捨てて (hitvāna)」 (Th.990a)
 「貪りと怒りを (rāgaṇ ca dosaṇ ca) 捨てて (hitvā)」 (Thī.18cd)
 「あらゆる煩惱を (āsave) 捨てた (pahāsim)」 (Thī.101c)
 「私のあらゆる貪りは (rāgo) 捨て去られた (pahino)」 (Th.79a)
 「自惚れを捨て去った (pahinamāno)」 (Sn.370a, Dh.94c, Th.205c, 206c)
 「私はこの欲望を (kāmaṃ) 捨てて (ujjhivā)」 (Th.298a)
 「妄執を (taṇhāya) 捨て去ることによって (vipphānena) 涅槃 (nibbānaṃ) といわれる。」 (SN.I-7-4)
 「生起と消滅をも捨てた (vibhavaṇ ca bhavaṇ ca vipphāya)」 (Sn.514c)

- 「あらゆる貪りは (rāgo) 引き抜かれた (samūhato)」(Thi.34b, cf. Th.79b)
 「憂いという汚れを (sokamaḥ) 取り去った (ahāsi)」(Sn.469d)
 「疑念を (vicikicchānaṃ) 断ち切る者 (chettā)」(Sn.343b, cf. Th.1263b)
 「魔王の束縛を (mārassa bandhanaṃ) 断ち切って (chetvā)」(Th.298b)
 「あなたは、貪りと怒りを (rāgañ ca dosaṇ ca) 断ち切って (chetvā), 涅槃に (nibbānaṃ) 至るであろう」(Dhp.369cd)
 「私たちの疑念を (vicikicchānaṃ) 断ち切って下さい (chind')」(Th.1266a)
 「苦悩は (parilāho) 完全に断ち切られた (samucchinno)」(Thi.34c)
 「あらゆる絆は (yogā) 完全に断ち切られた (samucchinna)」(Thi.76a)
 「私のあらゆる迷妄は (moho) 離れ去った (vigato)」(Th.79c)
 「苦しみを (dukkhaṃ) 減じる者は (apacinato)」(Th.807e)
 「あらゆる煩惱を (āsava) 捨てて (khepetvā)」(Th.364c, Thi.76c)
 「欲望の対象を (kāme) 押しやって (panujja)」(Sn.359c, cf. Dhp.383b)
 「激しい洪水が (mahogho) 弱い葦の堤を打ち流すように、死の魔王の軍を追い払う (pānudi) 者は」(Th.7ab)
 「怒りを取り除いた (panuṇṇakodho)」(Sn.469c)
 「風が木の葉を吹き散らす (dhunāti) ように、悪しきものを (pāpake dhamme) 吹き払う」(Th.1006cd)

この作用を示す動詞の語根は、既に見られた $vi\sqrt{i}$, $vi\sqrt{nī}$, $\bar{a}\sqrt{barh}$, $vi\text{-}pr\sqrt{hā}$, $pr\sqrt{nud}$, $pr\sqrt{hā}$ の他に, $vi\text{-}sa\sqrt{m}\sqrt{yuj}$ (分離する), $vi\sqrt{rañj}$ (色褪せる), \sqrt{vam} (吐く), $\sqrt{hā}$ (捨て去る), $ud\sqrt{hā}$ (捨て去る), $sa\text{-}ud\sqrt{hr}$ (引き抜く), \sqrt{hr} (運ぶ), \sqrt{chid} (切る), $sa\text{-}ud\sqrt{chid}$ (根絶する), $vi\sqrt{gam}$ (去る), $ap\sqrt{ci}$ (減じる), $\sqrt{kṣip}$ (投げる), $\sqrt{dhū}$ (振り払う) を挙げることができる。

(3) 超越の作用を意味する用例

- 「疑いを超えた (vitiṇṇakaṅkho)」(Sn.514b, Th.5b, 8b)
 「執著を超えた (saṅgātito)」(Th.1022b)
 「生き死にを繰り返す輪廻の彼岸に到った (jātimaraṇapāragu)」(Th.1022d)
 「あらゆる貪りの道を外れた (rāgapathaṃ upātivatto)」(Sn.370b)

この作用を表す動詞の語根は、用例から $vi\sqrt{tṛ}$ (横断する), $ati\sqrt{i}$ (横切る), $pāra\sqrt{gam}$ (向こうに行く), $upa\text{-}ati\sqrt{vṛt}$ (越える) を知ることができる。

以上、比較的古層に属するとされる韻文資料から眺めたが、(2) 離反・分離の作用を示す用例が圧倒的に多く、(3) の用例は比較的少ないことが知れる。

〔3〕 煩惱の消滅の形態に関する考察

古層の韻文文献において悟りの妨げがどのように消滅されるのかを眺めてきたが、それらの用例から消滅の仕方が抑止と離反・分離と超越のほぼ三種の形態によって説かれているものと考え、それに従って煩惱の消滅の形態を三種に分類してまとめた。その中、抑止の作用とは、煩惱など悟りの妨げとなるものに対して抑制したり、捨断したり、静めたり、滅したりすることによって、それらが消滅されることを意味し、離反・分離の作用とは、煩惱などを取り除いたり、捨て去ったり、断ち切ったりと、外へと排除されることによって、それらが消滅されることを意味し、超越の作用とは、煩惱それ自体を消滅するのではなく、煩惱などから離れたり、煩惱を超えたりすることによって、消滅されるものと見做すことである。この三種の意味を換言すれば、抑止の作用は煩惱が個体の内部において活動することを制御したり、その侵入を防ぐことによって、その汚れに染まらないことであり、離反の作用は煩惱を外へ排除することによって個体はその汚れから離れ、清浄になることであり、超越の作用は離反の作用と正反対の作用で、個体自らが煩惱から離れることによってその汚れから解放されることを意味しているものと考えられる。このように、最初期の仏教は、悟りの妨げとなるものをこのような三種の異なった方法によって消滅することを説いていたことが判る。

この論点は、単に表現の問題として処理できるほどの簡単な問題ではなく、ここには恐らく最初期の仏教に秘められた煩惱に対する見解が表出しているようである。例えば、この煩惱の異なった消滅の仕方は、一方で煩惱がどこに存在するものであるのかという手掛かりを教えてくれるのである。即ち、煩惱の所在の問題をここに提起しているのである。だから、煩惱の消滅の仕方は、同時に煩惱の所在の問題を提起していることにもなるのである。抑止の作用によって煩惱の消滅を説く裏には、煩惱が個体の内部に存在するものと考えられていたと見做せるし、離反・分離の作用の裏には、煩惱は個体に付着したものと考えていたと見做せる²⁾。超越の作用に関しては、前の二者とは異なり、煩惱の所在のありようを知ることはできないが、煩惱それ自体の残存を認めて、個体がある場から超えて、異質な清浄な場に移すことを意味しているようである。即ち、主体自体が煩惱から離脱する形態をもって表現される作用である。

これを悟り、涅槃の視点で眺めれば、煩惱が抑止されたり、離反することによって悟りの妨げが消滅した状態を悟りとするのか、主体が煩惱や妨げから遠ざかり

離れることによって得られた状態を悟りとするのかという問題である。前者の離反の形態に関しては、ジャイナ教の古層經典類において tapas（苦行）の「振り払う」という機能が見られ、更には karman（業）の消滅を説くところにも「振り払う」という表現が見られる³⁾が、このジャイナ教の考え方が原始仏教に見られる「取り除く」という離反・分離作用による煩惱の消滅方法と極めて類似していることが判る。当時の仏教やジャイナ教などが同一性を共有していたという土壤を考えれば、ある意味では当然と言えるかもしれない。後者の形態は、主体が煩惱の場から離れることが即ち清浄な境地を得たとする立場を示すものであり、これは彼岸に至ることと輪廻や煩惱からの解脱などの考え方と一致する形態を有するものである。このように、煩惱の消滅の仕方に異なった考え方が存在することは、涅槃の語義を考察する時も無視されるべきものではなく、むしろ両者は運動したものととして解するのが妥当であろう。故に、涅槃に関連する用語の意味も単一の意味に必ずしも限定して考える必要はなく、煩惱の消滅法のように異なった意味から解釈すべきものであろう⁴⁾。

以上、古層の韻文文献から眺めてきたこのような三種の煩惱の消滅の考え方は、涅槃などの仏教の主要な概念を理解する時の基本的な見方であり、それは以後の仏教思想の展開の中でも形を変えながら保持されたものと言えよう。いずれにしても、この考え方の基本的構造はある意味では涅槃論や煩惱論などの仏教思想の源流ともいうべき意義を有しているものと考えられる。

-
- 1) 中村元博士は、「漢訳者は、仏教の理想の境地（nirodha）を「滅」という字で表現したために、仏教は虚無論を説くものだというような印象を一般に与えてしまった。しかし、実はほしいままの欲望を制御し、苦しみをとじこめてしまうのがもとの意味であった、その結果としてしずまったやわらぎの状態をもたらすことを、合わせてめざしていたのであった。」と指摘する。『原始仏教の思想 下』（春秋社）pp. 15-16 参照。
 - 2) 並川孝儀「初期仏典にみる煩惱の所在—「覆うもの」と「覆われるもの」—」『印度学佛教学研究』第 47 卷第 1 号, pp. (94)-(100) を参照されたい。そこでは、悟りの妨げや煩惱というものが「覆うもの」として表現されているのか、「覆われるもの」として表現されているのかという視点から捉え、そこから煩惱の所在を内在しているものなのか、外部に付着したものであるのかを考察し、古層の韻文資料に両者の用法が見られることを指摘している。
 - 3) ジャイナ教の古層經典類において tapas に「振り払う」という機能が存在し、更に karman の消滅を説くところにも「振り払う」という表現が多く見られ、この「振り払う=除去する」という概念は「贖罪・浄化」思想へとつながるものであるという指摘

は、次の論文に見られる。榎本正明「Jaina の tapas について」『華頂短期大学研究紀要』第 32 号 pp. (12)-(30) 参照。原始仏教に見られるこの「取り除く」という離反・分離作用による煩惱の消滅方法も、当然のことジャイナ教思想との関連で考察しなければならない問題であろう。ただ、ジャイナ教の「振り払う」という用語の語根が√dhū であるのに対して、仏教ではこの語根の同様の用例は Th.1006cd. に「風が木の葉を吹き散らす (dhunāti) ように、悪しきものを (pāpake dhamme) 吹き払う」と見られるが、その用例はあまり見られず、少なくともこの点で両者は少し異なっている。また、ウパニシャッドでも「悪しきもの」や「業」などが「振り払う (√dhū)」対象として捉えられている、と指摘されている(榎本同論文 pp. (23)-(24)) 点から見て、煩惱のようなものが「振り払われるもの」、「取り除かれるもの」とする見方は、仏教以前からのものと考えられる。

- 4) 涅槃の語義を考察する時、涅槃の境地やその体得が煩惱の消滅と表裏一体の関係にあることに基づいて考えるならば、例えば涅槃の関連語である nibbuta (< nir√vr̥) の語義を考察する場合、次のような見方ができるであろう。nibbuta は、それと関連する用語の例から「抑止された、制御された」という作用と、「取り除いた、捨て去った」という作用の両義を有していることが判明した。即ち、抑止の作用と離反・分離の作用という相反する作用を有しているのである。ここから、nibbuta の語根を nir√vr̥ とする時、その接頭辞 nir- の解釈によって、nibbuta の語義は「しっかりと覆う」という意味と「覆いを取り除く」という意味の二つの解釈が可能になる。この点に関しては、北海道印度哲学仏教学会第 15 回学術大会(平成 11 年 7 月 31 日、北海道武蔵女子短期大学)において「初期仏典における nibbuta の用法」と題して発表した。詳しくは別稿にて論じる予定である。

〈キーワード〉 煩惱の消滅の形態, 煩惱, 涅槃, 初期經典(韻文資料), 彼岸
(佛教学大学教授, 文学博士)